

将来の生き方についての意識調査

— 教育環境アセスメントに関する研究第8報告 —

金平文二*・岩井絹江**

(平成元年9月30日受理)

An Opinion Survey on Future Life Styles: A Study to Assess the Educational Environment

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received September 30, 1989)

はじめに

わが国における高齢化社会の到来は必至とされているが、このような社会の到来に対して、それぞれの世代はさまざまな予測をしていると思われる。今回は、現在の青年層にとっては、40年～50年先のこともかもしれないが、青年層が高齢化についてどのように考え、どのような態度を形成しているのかについて調査を行うことによって、青年の意識・態度・行動の実態について把握するとともに、高齢化社会への対応をどのように考えたらよいかについて、何らかの示唆を得ようとしたものである。

I 研究の目的

高齢化社会の到来に対してどのように対応するかについては、さまざまな角度からの検討が必要であるが、今回の研究では、最近の女子学生が高齢化社会時代に対して、どのような生き方をしようとしているかを把握することによって、快適な社会生活を設計するにはどのような措置が必要かを考えるための指針を得ようとするものである。

II 研究の方法

研究の方法として、質問紙法による意識調査によってデータの収集、分析を行うことにした。

1. 調査対象

今回の調査はパイロット・スタディであるため、本学大学3年、短大2年に対して、いくつかのクラスを無作為に抽出し、調査対象とした。質問紙の配布数は、352

* 児童学科

** 学生部

名で、回収率は98%である。

2. 調査の実施期日

平成元年7月8日～7月10日の期間に調査を実施し、各学年において、調査対象者に調査の主旨を説明し、調査票の配布・回収を行った。

3. 調査票の設計

調査票の作成にあたっては、昭和62年、63年度の朝日新聞記事のうち、高齢化社会に関する記事をすべて切り抜き、それらの記事をKJ法的手法によって分類、整理し、それを参考として調査票を作成した。

調査票の質問分野は次のとおりであり、多肢選択式の質問34問によって構成した。

(質問分野)

- i 高齢者に対するイメージ
- ii 高齢者としての生活環境
- iii 高齢者としての健康
- iv 高齢者としての生きがい
- v 高齢化社会に対する生活設計

回答方法は、調査票の各質問の選択肢に直接記入させる記入方式とした。

4. 調査結果の集計

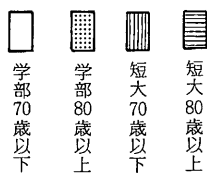
調査データの集計は手作業によって、調査対象を大学3年、短大2年の2グループ別に、各質問項目における選択肢の度数、パーセンテージを算出して図式化し、それらの結果について考察を行った。

結果については、数表による表示は省略し、分析対象区分別に、質問項目についての選択肢別のパーセンテージを比較棒グラフによって表示した。調査結果の概要は以下のとおりである。

5. 調査結果とその方法

問1. 「人生80年」といわれている今日、あなたは自分自身の人生は何年代だと思いますか。

1. 60歳未満
2. 70歳未満
3. 80歳未満
4. 80歳以上



(以下問1～問13同じ)

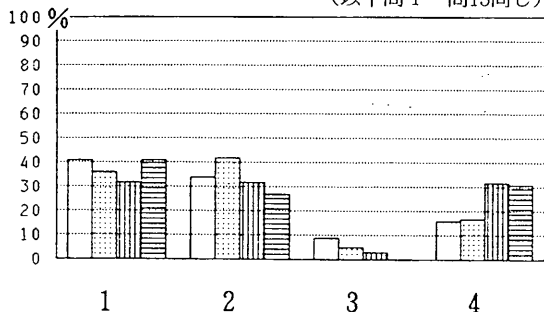


図1. 自分自身の予測年齢

問1は、自分自身の人生の予測年齢について問うたものであるが、予測年齢が大学・短大学生とも70歳未満以下のグループと80歳未満以上のグループとがほぼ半数づつになっている。このことから、人生についての予測年齢によって、両グループ（Lグループ、Hグループ）に分け、その予測の差によって以下の質問項目にならかの差異がみられるかということ予想して、学年別、L、Hグループ別に結果を図示することとした。

問2. 高齢化社会に先だちあなたは老後についてどう考えますか。

1. 全く考えていない
2. ある程度考えている
3. 考えている
4. 考えたくない

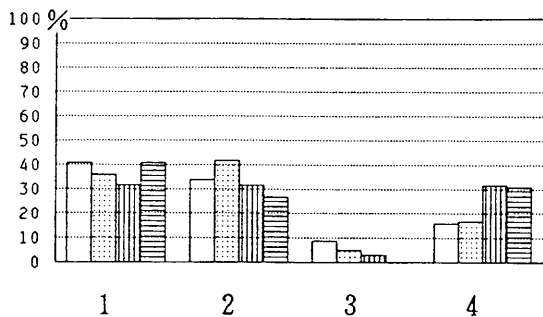


図2. 老後についての考え

調査対象は20歳前後の青年層であるが、高齢化社会や老後の問題を考えていく上で、青年層にとってだいぶのことである50～60年後の人生についてどう考えているかはおおいに関心のあることであった。大短のLHグループとも、「1. 全く考えていない」とするものが約40%、さらに約20%が「4. 考えたくない」を選んでおり、当然予測された結果ではあるが、若年層ほどこの問題について関心が低いということがわかり、今後、高齢化社会への対応を考える上で大きな参考になったように思われる。

さらに、新聞や世論で高齢化や老人問題が取り上げられるようになって長くなるが、まだまだ自分自身の問題としてではなく、遠い他人のことと、とらえている若者の姿が表われているように思われる。しかし、約40%の学生は、「2. ある程度考えている」、「3. 考えている」を選んでおり老後のことについてある程度の関心をもっていることもわかった。

男女とも平均寿命が上がって80歳に近づいているが、長い人生をより充実した生き方をするためには、男女ともに若い時から老後のことも考えて、人生設計の出来るような教育が必要であろうと思われる。また近年、女性の労働人口は半数を超え、結婚後も子育てをしながら働く女性が増加しているにもかかわらず、若い女性の中には自分の人生設計が学校卒業、就職、結婚、出産までしか考えられていない場合がまだまだ多いように思われる。女性の場合は、結婚相手の考え方が人生に大きくかわってくることが多いので、「自分はどんな生き方をしたいか」という視点に立って結婚相手を選ぶ必要もあるだろうし、長い人生を特に子育て後、夫婦二人だけとなる長い年月の過ごし方をも含めて若い時から十分考えた生き方をしていく必要があるように思われる。

問3. あなたもやがては高齢者となるわけですが、その時一番不安なことは何ですか。

1. 健康
2. 遺産などの内容
3. 住宅（老人ホームなどの施設も含む）
4. 介護してもらうこと
5. 家庭との関係（家族への負担）
6. 生活費
7. 精神面（孤独、疎外感）
8. その他

将来の生き方についての意識調査

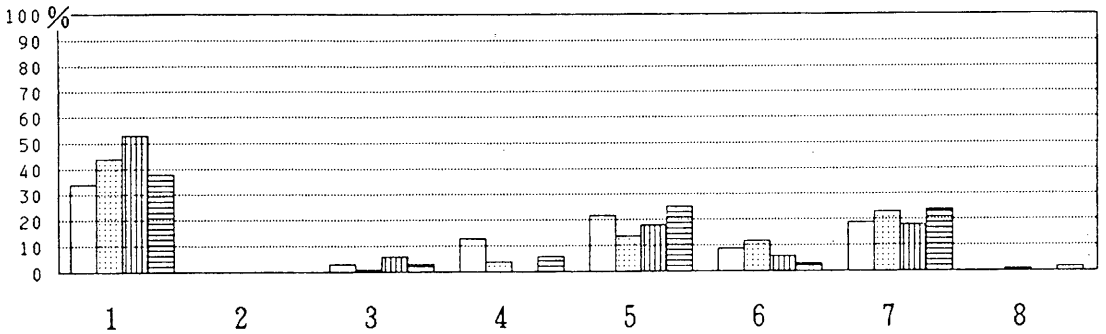


図3. 老後の不安

自らが高齢者となった場合の不安としては、「1. 健康」、「5. 家庭との関係（家族への負担）」、「7. 精神面（孤独、疎外感）」があげられている。身体的に老化する高齢者にとって一番不安なことはやはり健康であろうと学生も考えているようであり、この傾向は「Hグループ」の方がやや高い数値を示している。人間が快適な生活を過ごすにはどの年代もまず健康であろう。特に高齢になればなるほど健康の問題は生きていく上で切り離せないことである。しかし、現状では年齢が進み身体に異常を感じ始めてから健康に留意し始める人が多いのではないだろうか。基本的には“自分の身体には自分で責任を持ち、健康管理は自分で行う”という考え方が必要である。今の若者が高齢となる数十年後には老人人口が大きく膨張し、国民の $\frac{1}{4}$ が老人であるという予測からみても“自分の健康は自分で守る”という考え方が長い学校教育の中に含まれるべきであろう。7つの選択肢の中で「2. 遺産の問題」を選んだ学生が0%であったのは当然の結果であろうと思うが、孤独・疎外感などの精神的な面や家族への負担の心配などが「Hグループ」では「Lグループ」より多少、多くみられる。

青年層が高齢になってからの不安を現実的に考慮することは難しいかもしれないが、人間が生きていく上で必要な健康、経済、心、家庭という点について、若い間から考えられるような教育をしていくべきではないかと思われる。

問4. あなたにとって60歳代とは人生の中でどんな時期だと思えますか。

1. 仕事に生きる時
2. 引退の時
3. 趣味に生きる時
4. 隠居の時

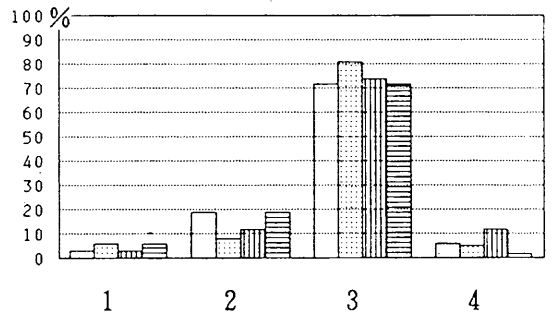


図4. 60歳代の時期

青年層にとって60歳代とはどんな時期だと思っているのであろうか。約75%が「3. 趣味に生きる時」と回答している。老後において、自分が趣味に打ち込み、そこに生きがいを感じることができるとことは素晴らしいことだと思う。しかし、そのような趣味に喜びや生きがいを見出すためには、老後まで継続できるような趣味を若いうちに自らが見出しておくことがきわめて重要なことだと思うし、また、何らかの趣味を持って幅広い生き方をすることはどの世代にも必要なことであろう。

「2. 引退の時」、「4. 隠居の時」を選んでいる学生が十数パーセントいたが、生きていくということに引退、隠居はないし、60代はまだまだ身心ともに元気な年代である。若い間から、自らの生涯教育を考えられるような教育が必要であるし、特に女子学生には、“母親や妻としてではなく1人の人間としてどう生きていくか”を考えられる女性になってもらいたいと思う。

問5. あなたの老後はどのような住宅に住みたいと思えますか。

1. 有料老人ホーム
2. 国や自治体の老人ホーム

3. 夫婦2人だけの住宅
4. 子供との同居住宅
5. その他

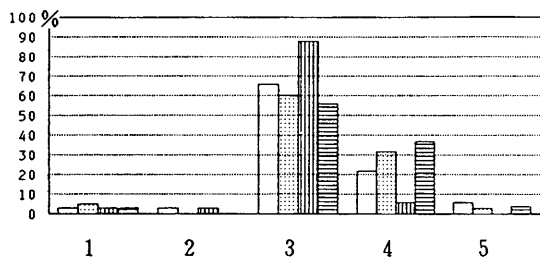


図5. 老後の住宅

老後の生活の根拠として住宅問題はきわめて重要な意味をもっている。「3. 夫婦2人だけの住宅」を選んでいる学生が約70%を占めており、短大70歳未満グループでは90%近くになっている。次いで「4. 子供との同居の住宅」が約20%となっている。最近ではかなり快適な環境や施設を持つ有料老人ホームが建設されつつあるが、青年層へのPRも薄く、青年層の関心が低いのは当然であろうし、老人ホームという住宅のイメージがあまりよくないのかもしれない。住宅があり、健康であるならば老人夫婦の生活の場としては、やはり夫婦2人だけの住宅が最高であると思われる。最近の土地、住宅事情からみて、かなりむずかしい問題が多々あるが、青年層が描いている希望が十分かなえられるような、政策と住宅拡充が望まれる。

問6. あなたは親子同居についてどう思いますか。

1. 親子同居は賛成である。
2. 事情の許すかぎり、親子同居がよい。
3. お互いの気くばりが必要で親子同居はあまり賛成しない。
4. 親子同居には反対である。

親子同居の問題について、「2. 事情の許すかぎり、親子同居がよい」が約60%あり、「1. 親子同居は賛成である」を含めて約70%が親子同居に賛成している。前問の住宅に関する設問の回答と異った方向を示していることが気になるが、親子の愛情やきずな、自分自身の健康問題を含めて、同居生活を希望する青年層がかなり多いことがわかる。しかし、反面、約30%が「3. お互いの気くばりが必要で親子同居はあまり賛成しない」と回答している。たしかに、親子同居は望しいと思われるが、実際の生活の場ということになると親子の世代間の

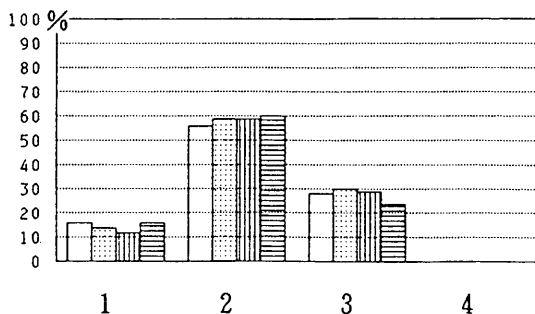


図6. 親子同居について

考え方のギャップなどがあり、難しい点もかなりあると思う。スープのさめない距離ということが昔から言われているが、高齢化社会へ対応するために、親子の同居を円滑にするための住宅設計のあり方について、種々の工夫がこらされるようになってきていることはきわめてよい傾向であると思われる。

問7. あなたは両親の面倒や介護をすることについてどう思いますか。

1. 身近な子どもが親と同居して介護をする。
2. 福祉サービス付きの高齢者住宅などに住んで介護してもらおう。
3. 両親の面倒はときどきみるが、お互いに独立である。
4. それぞれ独立しており、別居でお互いに干渉しない。

両親の面倒・介護の問題についての質問であるが、「1. 身近な子どもが介護をする」が約60%、「3. 両親の面倒はときどきみるがお互いに独立である」が、約40%を占め、2つのグループに分れている。青年層の間では、親子といってもお互いに独立しているという考え方もかなり強いようである。世代間の考え方として夫婦が生活の単位であるとする考え方が強くなってきている

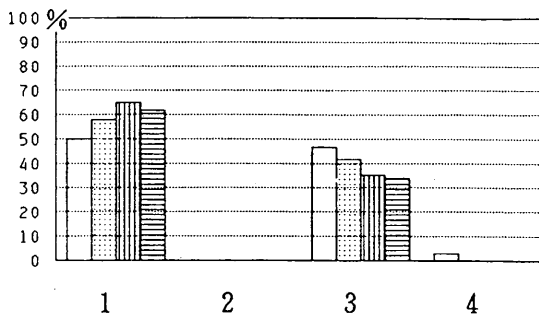


図7. 両親の面倒・介護

ことから、このような結果になっていると思われる。また、女子学生の場合、両親を自分の親と理解したか、将来の結婚相手の両親のことと理解したかによっても回答のしかたが異なるであろうと思われる。しかし、実際に介護を必要とする事態が起きた時には、子どもが介護することになると思うが、最近の青年層の考え方としては、子どもに依存するのではなく、ときには面倒をみるが、夫婦を中心とした生活を基盤とする考え方が、これから漸次増加してくるようと思われる。また女性がフルタイムで働くことがさらに多くなると思うが、介護休暇など制度上での整備、推進も必要になるだろうし、さらに女性だけに親の面倒をみさせて身心の負担を負わせるのではなく、男性も自分にかかわる問題としてとらえていく必要がある。

問8. もし、将来あなたの配偶者が手におえない重症の痴呆症になったらあなたはどのようにしますか。

1. 最後まで介護する（在宅看護）
2. 老人ホームまたは病院に入れる
3. 離婚する
4. その他

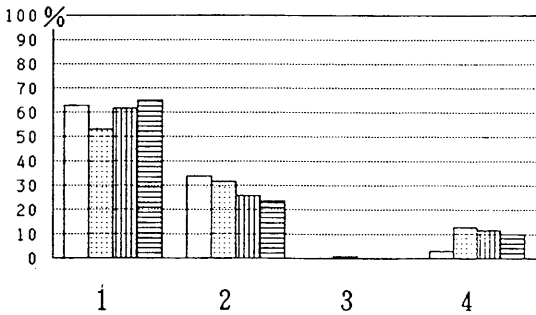


図8. 配偶者の介護

配偶者が重症の痴呆症になったらどうするかというかなり深刻な質問である。「1. 最後まで介護する」が約60%、「2. 老人ホームに入れる」が約30%となっている。症状の程度、家庭環境、生活条件などによって、その対応のしかたはケースによってさまざまであろうし、その時に自分の置かれている状況もわからない中での回答は難しいであろうと思われる。「老人ホームまたは病院へ入れる」という回答が約30%というのは多少意外な感じもした。従来の習慣からいえば配偶者が介護するという考え方が多かったのに対し、親しい配偶者であっても専門の所で治療、介護を受けた方がよいという考え方がふえてきているようである。家庭介護は肉身の愛情によ

って重症の痴呆症もかなり回復させるという症例もあるようだが、家庭介護は介護者の負担、特に主婦である女性の負担は大きく、高齢者の介護をどうするかについて、今後多角的な検討が必要であろうと思われる。

問9. 60歳を過ぎて働きたいと思いませんか。

1. できるだけ長く仕事をしたい
2. 70歳ぐらいまで仕事をしたい
3. 65歳ぐらいまで仕事をしたい
4. 働きたくない

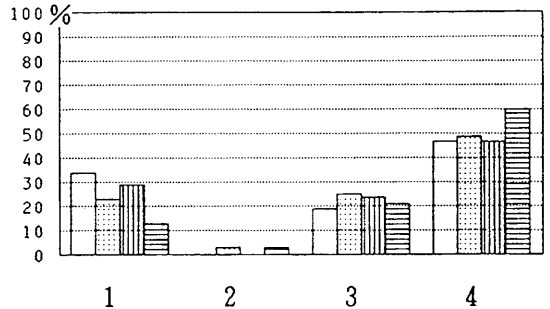


図9. 60歳以降の労働

60歳以降の労働の問題である。「4. 働きたくない」とするものが約50%を占めている。まだ仕事を持っていないので仕事への意欲、興味がないためであると思われるが、女であることに甘え、楽をして過ごしたいという若い女性に増加しつつある意識傾向であってほしくない。しかし、「1. できるだけ長く仕事をしたい」約25%、「3. 65歳ぐらいまで仕事をしたい」約25%で合すると約半数が長く働いていたいと思っているようである。仕事への興味、意欲、身体状況、家庭環境によって長く働きたいというケースはさまざまであると思われるが、最近の女性の社会進出や個性的な生き方などの傾向からみて、できるだけ長く働きたい女性が多くなることは、高齢化社会への対応のしかたとしてきわめて望ましい傾向であると思われる。そのための職場環境、種々の制度の充実、施設の拡充をはかっていくことが必要である。

これからは女性も、結婚するか、しないか、結婚後も働くか、働かないか、どんな人生を過ごすのかは自分で選ぶ時代にきていると思われる。学校教育の中でも、男女が各々に自分の生き方を自分で選べ、また、誰かに依存せずに生きていけるような教育を行っていく必要がある。特に高齢化社会への対応という点から考えても、きわめて重要なことではないかと考えられる。

問10. 厚生年金の「65歳支給」をどう思いますか。

1. 賛成
2. 定年が延長されるなら支給が遅れてもかまわない
3. 不本意だがしかたがないから賛成
4. 60歳まで働けば十分で、あとは気ままに暮したいから反対
5. とにかく反対である

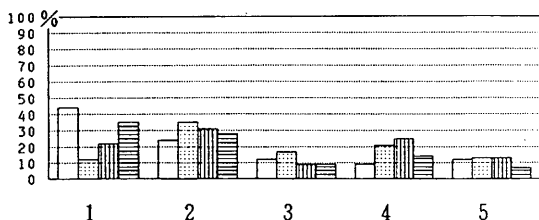


図10. 厚生年金の65歳支給

老後の生活の保障として、厚生年金の支給開始年齢は一般的にはかなり関心の高いところであるが、青年層にとっては、まだかなり先の問題であるがどのように考えているのか傾向をみることにした。各選択肢に対する回答はかなりバラつきがみられる。高齢者層が増加するにつれて、その財源を負担するのは青年層であり、できれば早く支給されることがのぞまれるところかもしれないが、65歳支給は止むを得ないと考えているようである。このことは定年制とも関連があるが、高齢者であっても身体的に働ける余裕と能力がある人に対して、できるだけ雇用の機会を提供できるような措置を考えていくことが必要であるように思われる。

問11. 老後の人生設計は50歳からと言われていますが、その時どのようにしたいと思いますか。

1. 自分の趣味など永らく温めてきたライフ・ワークにとりかかる
2. ボランティア活動など社会奉仕的な活動に従事したい
3. これまでの経験の蓄積の上に、新しい仕事を見出し、それに取り組んでいく
4. 特に何をするというのでもないが、地域や社会の色々な人とつき合っていきたい
5. その他

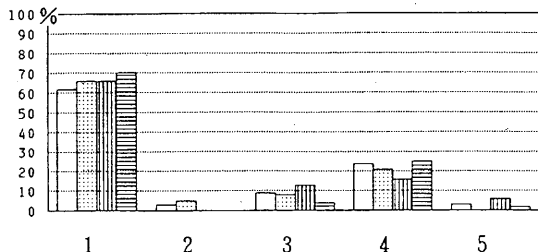


図11. 50歳からの人生設計

高齢者になって老後をどう過すかということは、本人にとっては関心の高い分野であると思われるが、「1. 自分の趣味などライフ・ワークにとりかかる」という回答が約65%を占めている。自分のライフ・ワークに着手するという事は、老後の充実感、生きがいを高めるうえできわめてのぞましい生き方であると思う。しかし、「2. 社会奉仕的な活動に従事したい」とするものがきわめて少ないのが意外であった。これは、他人には干渉されたくない、干渉しないという若者の考えと、個性的な生き方とするという考えが人々の間に浸透したことにも関連があるように思われる。このように個性的な生き方も尊重されるべき点もあろうが、自立自助と同時に相互扶助という点から考えると、ボランティア活動・社会奉仕的活動や地域の人々との幅広いつながりの必要性も何らかの形で、教育の中で取り入れていく必要があるのではないだろうか。

問12. あなたの老後の人生設計についてどのように考えていますか。

1. 社会の中で自分の役割を持ち、人びとに役立つ生き方をしたい
2. これまでやろうとしてきてもできなかったライフ・ワークに取りかかりたい
3. 体はおとろえてきても気持ちだけははつらつとした生き方をしたい
4. できるだけ家族に頼らずに、自分のことは自分でするようにしたい
5. その他

老後の人生設計について「3. 体はおとろえてきても気持ちははつらつとした生き方をしたい」が約50%を占めている。次いで「2. ライフ・ワークに取りかかりたい」が約20%、「4. 家族に頼らず自分のことは自分でする」が約15%となっている。人間だれしも体力がおとろえて

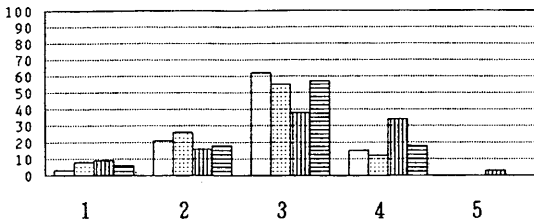


図12. 老後の人生設計

くると精神的にも委縮してくるものだが、青年層は老後であってもはつらつとした生き方をしたいと考えており、このような生き方はすばらしいことだと思う。しかし、はつらつとした生き方をするには、個人としての生活設計、人生設計を若いうちから考え、心身ともによい環境作りをしておくとともに、個人サイドだけではなく、大きな視点に立った社会・経済・福祉・労働サイドからの高齢者対策が考えられる必要があるように思われる。

問13. 高齢者に対する措置としてどんなことが必要ですか。

1. 寝たきり老人、痴呆性老人への栄養、運動の処方のしかた
2. 身体・精神の機能低下を防ぐリハビリプログラムの作成を考える
3. 高齢者が暮しやすい生活施設のあり方を考える
4. 相互援助を含めた地域社会づくりのあり方について考える
5. その他

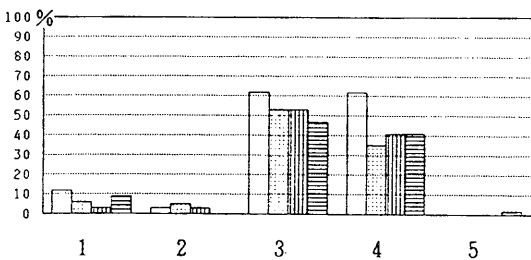


図13. 高齢者に対する措置

高齢者に対する措置について、「3. 暮しやすい生活環境」約50%、「4. 相互援助を含めた地域社会づくり」が約40%となっている。高齢者をめぐる物的環境としての生活施設、高齢者への人間関係を配慮した地域社会づくりなど、物的、人的諸条件を整えていくことが高齢者に対する措置としてのぞましいことが指摘されている。

現在、わが国は豊かな社会であるが、やがてきたるべき高齢化社会への対応について、青年層がのぞむような方向への措置を学校教育も含めて積極的に幅広く思考するとともに、それらをどのように具体化していくかについて模索していく必要があることを示唆している。

おわりに

以上の調査結果によって、きたるべき高齢化社会に対して、青年層がどのように考え、どう対応しようとしているかについての資料をうることができた。青年層にとってはかなり遠い将来のことに関する事柄であるため、明確な考えを持つことは無理かもしれないので、回答はかなりイメージ的要素が強いと思われる。しかし、高齢化社会の到来はわが国において必然的なことであり、若いうちから、生活設計として将来にどう備えるかについて考え、関心を持つことは、高齢化社会のあり方を考える上で必要なことであり、多くの示唆が得られるように思う。この研究は、これらの問題について、かなり限定された調査ではあるが、今後さらに中高年層を含めた広範囲にわたる調査を継続研究として実施し、よりのぞましい高齢化社会への対応としてどうあるべきかについての有効な示唆を得たいと考えている。

参考文献

1. 金平文二・岩井絹江：女子学生の意識についての調査－教育環境アセスメントに関する研究－第1報告 東京家政大学研究紀要, 24, pp. 49-69 (1984)
2. 金平文二・岩井絹江：人間成長過程における教育環境阻害要因の探索－教育環境アセスメントに関する研究－第2報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp. 53-62 (1985)
3. 金平文二・岩井絹江：教育環境を阻害する各種要因の探索－教育環境アセスメントに関する研究－第3報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp. 61-68 (1985)
4. 金平文二・岩井絹江：教育環境アセスメントに関する研究－第4報告 東京家政大学研究紀要, 26, pp. 141-147 (1986)
5. 金平文二・岩井絹江：青少年の問題行動についての分析－教育環境アセスメントに関する研究－第5報告 東京家政大学研究紀要, 27, pp. 91-96 (1987)
6. 金平文二・岩井絹江：女子青年の意識についての調

査－教育環境アセスメントに関する研究－第6報告
東京家政大学研究紀要, 28, pp. 29～37 (1988)

意識調査－教育環境アセスメントに関する研究－第
7報告 東京家政大学研究紀要, 29, pp. 55～61
(1989)

7. 金平文二・岩井絹江：女子学生の生き方についての